

ミクロネシア連邦・グアムにおける研修を通して

一島の現状（生活、環境、文化）

園田真一郎（農学研究科）

1. はじめに

2014年9月7日から13日にかけて、太平洋島嶼学特論の講義でミクロネシア連邦チューク州およびグアムを訪れた。本講義の目的は、ヒトの生存基盤の再確認、国際的な視野の獲得、現場に即した課題発見・解決能力の向上、コミュニケーション能力の向上等である。現地では山本宗立准教授の引率によりレンタカーで島を巡り、またピス島では島民の方のご好意により島内外で生活および散策する機会を得た。これらの経験をもとに、各所の文化、暮らし、観光および農水産業に着目して、各現状や筆者の所見を以下に述べていく。

2. 研修の概要

7日間の海外研修は、以下の日程(表1)で行った。

第1表 太平洋島嶼学特論 研修日程

月日	曜日	移動経路	内容
9月7日	日	福岡空港→グアム→ウェノ島	移動
9月8日	月	ウェノ島→ピス島	島内散策、植生調査等(ピス)
9月9日	火	ピス島※途中近くの無人島へ	水産資源調査、食文化調査
9月10日	水	ピス島→ウェノ島	観光業調査(ウェノ)
9月11日	木	ウェノ島→グアム	ゴカイ採集、市場調査(ウェノ)、 ピス島出身の方のご家族と夕食(グアム)
9月12日	金	グアム	観光業調査、歴史・文化学習、グアム大学での講義
9月13日	土	グアム→福岡空港	移動

3. チューク州

3-1 ウェノ島

ミクロネシア連邦はフィリピンの東に浮かぶ島々であり、ヤップ州、チューク州、ポンペイ州およびコスラエ州の4州から構成されている。そのうち我々がまず訪れたのはチューク州ウェノ島である。そこはミクロネシア連邦で最も人口が多い自治体で交通の基点となるチューク国際空港が立地し、道には人や車の行き来が多くみられ、道沿いには店が並んでいた。しかし、道路環境は劣悪であった。道路は水はけが悪くて所どころ冠水状態にあり、また段差が多く車内が大きく揺れるため、徐行して移動しなければならない始末だった(図1)。現状として島内の移動に長い時間を要することや、車のタイヤへの負担が大きい問題がみられた。これらのことから、道路の整備は人々の生活のためだけでなく、観光業を推し進める上で優先して行われるべき課題であると感じた。またもう1つウェノ島で気になった点が、島内のごみ問題である。見渡す限り青くきれいな海とは対称的に、人々が暮らす陸地には多くのごみで溢れていた。JICAの協力により各地にごみ箱が設置されていたが、それでもまだ十分な効果がでていない印象があった。元来、島民の方々は島で採

れた農作物や水産物を主に食してきて、そこから出たごみは自然に還るものであったと思われる。そのため現地の人のごみを路上に捨てることに関してあまり抵抗がない可能性がある。近年はさらにビニールやプラスチック類などの輸入物が増え、分解しにくいごみが増えており、これから一層深刻化することが予想される。小さな島では、大きな廃棄物処理場を設置することも困難であり、また原油価格高騰のため大規模なごみ処理はあまり現実的でなく、短期で解消できる問題ではないかもしれない。現段階では島民のごみに対する関心を高めるとともに、ごみそのものを減らす工夫が必要だと考える。

島内の農業に関しては、タロイモをはじめ、パンノキ、バナナ、マンゴー、ライチ、ココナッツなどの熱帯果樹がみられた（図 2）。しかしその栽培は果樹園としてではなく、民家の敷地に無造作に植えられたもので、各家庭で食べる分を生産するスタイルが多いようである。また雑草が多くなると草払い機を使用して草生管理する姿が見受けられた。

市場調査を行ったところ、道脇の売店に並ぶ品はバナナ・ココナッツ・カンキツ等の果実や、ナス・キュウリ等の野菜、魚・イセエビ等の海産物がみられ、葉物野菜はみられなかった。食品以外では花の髪飾りといった手作りの工芸品がみられた。スーパーマーケットには輸入物が大半を占めており、米や鶏肉などの食品、その他加工食品も他国からの輸入品であった。

ウェノ島での観光に関しては、海のレジャーが中心であった。チューク環礁の海底には、太平洋戦争時に沈んだ旧日本海軍の艦船が多く、沈没船をみることができる。島内にあるトラック・ブルー・ラグーン・リゾートという宿泊施設では、近くにダイブショップがあり、観光客が多くみられた。また、お土産は手編みの籠、貝殻細工、木彫りの置物など様々な種類があった。空港にある観光局を訪ねたところ、残念ながら関係者が不在でお話を聞くことができなかった。ホテルや空港、人通りの多い道などの場所に観光を広告するようなポスターやパンフレットは想像していたよりも少なかった。



図 1 車内から見たウェノ島の道路



図 2 ウェノ島に自生するココナッツ

3-2 ピス島

ピス島はウェノ島からボートで 1 時間弱かけて移動したところにある比較的小さな島である（図 3）。そこで我々はピス島での生活を経験し、暮らしや文化を学ぶことができた。ピス島では海に出て漁を行い、島に植生するココナッツ等の果樹を利用するなど半自給的な生活が営われていた。島内にはウェノ島にみられたような店が存在しないため、コメや

衣料品など島内で手に入らない食品や生活必需品は島外から購入する必要がある。

ピス島の農業は、島に自生している果樹やタロイモ、ウリ科野菜を利用して行われていた。中にはココナッツの幼木の周りに柵を立てる管理がみられた。文化に関しては、動物に対する考え方が日本人とピス島の人々で異なっていた。具体的には、日本人は家畜とペットは別々の概念で認識しているが、ピス島の人々は両者の概念を合わせたものだった。各家庭でイヌ、ネコ、ブタ、ニワトリと共に生活しているが、一部の動物たちにはそれぞれに愛称があり、イヌは番犬、ネコはネズミ取りといったように共同生活の中で役割が与えられている。その一方で、祝い事や訪問客が来た時などに食料となる場合がある。今回の訪問では島民の方々のご好意により、我々はイヌをいただくことができた。

ピス島での暮らしに関しては、夜になると辺りは真っ暗となり、懐中電灯なしに外へ出歩くことが困難な程であった。水は井戸水や雨水を利用しており、家の屋根はタンクに雨水が貯まるような工夫が施されていた。調理に関してはガスが存在しないため、毎度火を焚いて行っていた。また島内にはビンロウの文化が浸透しており、嗜好品として人気があり、嗜む場面が多くみられた。食に関しては、新鮮な魚を生食する食べ方があり、日本と同様に‘サシミ’と呼んでいた。しかし日本のように三枚におろして一枚一枚身を切るのではなく、魚に直接切れ目を入れる調理法であった（図 4）。味付けは醤油に加えてカンキツを搾るのが一般的であるようだった。



図 3 ピス島の外観



図 4 ‘サシミ’

4. グアム

グアムは太平洋にあるマリアナ諸島南端の島である。日本をはじめ、世界中から観光客が訪れ、観光業が経済面での大きな支えとなっている。街中は日本語表記の看板が多く、海外であることを忘れてしまいそうな感覚がした。グアムの観光客の 8 割が日本人であるようで、観光客のための工夫が各所にみられ、観光に特化した島である印象を受けた。グアム初日はピス島出身で現在はグアムに住んでおられる方の家を訪問し、夕食を共に過ごすことができた。そこでは、パンノキを発酵させて作る伝統料理をいただいたり、食後は歌を歌ったり、有意義な時間を過ごすことができた。

グアム 2 日目はレンタカーを借りてグアム南部を一周した。グアムの街中はショップや飲食店で溢れている一方で、島の南部は自然豊かな雰囲気が漂っていた。途中、チャモロ・ビレッジやグアム大学などを訪れ、グアムに古くから伝わるチャモロ文化や歴史、グアムでの教育現場、暮らしなどを学ぶことができた。チャモロ・ビレッジでは、案内人の方が海水から塩を作る方法や、ハイビスカスの皮を用いたヒモ作り、ココナッツミルクの作り方などを実践していただき、チャモロ文化を肌で感じることもできた(図 5)。グアム大学では、グアム大学初の日本人の先生であるイノウエ・スミス先生にご講義いただいた(図 6)。グアムではチャモロ人が優遇される風習があるようで、フィリピンやその他アジア諸国、ミクロネシア、アメリカから様々な人種が集まるグアムでは苦勞される方々が多いということだった。また、日本では女性が子育てに専念するために仕事を辞めるという考え方がある一方で、グアムには自立した女性が多く、いわゆる専業主婦という言葉もないようで、日本とグアムでは仕事と子育てに対して異なる考え方を持っていることが分かった。また教育現場では、教員の数不足している問題を抱えていることも知ることができた。



図 5 チャモロ・ビレッジにおけるココナッツミルク作りの説明



図 6 グアム大学における講義の様子

5. おわりに

今回の研修で初めて日本を離れることで、海外からみた日本や太平洋島嶼の現状を知ることができた。中でも電気・水道・ガスが自由に使えない環境に身を置くことで、我々が忘れかけていた生活基盤を身を以て知ることができたのは大きな経験であった。また各現場の良いところも課題とされている点も実際に目にすることができた。今後、真に求められていることは何か考えながら積極的に行動していきたいと思う。また、日本にいるばかりでは身につかない国際的な広い視野をもつための良いきっかけとなった。

グローバル化する現代において英語力が重要であることは分かっていたが、今回の研修で改めて思い知らされた。日本に帰ってくるとどうしても英語に触れる機会が減ってしまうが、今後、自ら積極的に学ぶ姿勢をもって、現場で生きる英語力を習得したい。山本宗立先生をはじめ、今回の研修に関わった皆様に心から感謝したい。ありがとうございました。